

2022年5月8日復活節第4主日説教

民数記 27章 12-23節

使徒言行録 13章 15-16, 26-33 《34-39》節

ヨハネによる福音書 10章 22-30節

今年も庭のバラがきれいに咲き始めました。今は赤いバラが咲いています。梅の実も成長し続けています。庭の自然は、例年と同じ歩みをしているようです。今後の教会の礼拝は、A Bの区分関係なく行う予定です。感染対策は大前提ですが、少しずついろいろなことを戻し、また改善していければと思います。

本日の旧約日課「民数記」の個所は、エジプトの出来事の最後の部分です。40年もの荒野での歩みが終わり、カナンに入る直前、そして、指導者がモーセからヨシュアに代わるお話のところからです。出エジプトは、主なる神様の救いの業として、イスラエルにとって大切な出来事です。しかし、見方を変えると、イスラエルの失敗の物語とも言えます。エジプトを脱出した多くの人びとが途中で死亡し、カナンの地に入れなかったからです。指導者のモーセですら、「わたしがイスラエルの人々に与えた土地を見渡しなさい。それを見た後、あなたもまた兄弟アロンと同じように、先祖の列に加えられよう。」(民数 27:12-14) とある通り、約束の地を見るだけで、中には入れませんでした。

モーセが入れなかった理由は、「ツインの荒れ野で共同体が争ったとき、あなたたちはわたしの命令に背き、あの水によって彼らの前にわたしの聖なることを示そうとしなかったからだ」と説明されています。「あなたたち」とありますが、モーセはイスラエルとして入れなかったようです。また、「このことはツインの荒れ野にあるカデシュのメリバの水のことを指している」(民数 27:14) と説明があります。これは「民数記」20章 1から 13節にある「メリバの泉」のお話のことを指しています。この「メリバの泉」の出来事は、他の個所でも取り上げられており(出エ 17:7、申命 32:51、33:8など)、ことに「詩編」第95編 8節の部分は有名です。

この有名な「メリバの泉」の出来事ですが、実際、モーセのどこがいけなかったのか明確ではありません。イスラエルの人々が、水不足のことで主なる神様に対して不平を言ったのは確かですが、イスラエルの人々は、そのほかにも食料不足で不平を言っています。また「聖なることを示そうとしなかった」ことだとなっているのですが、その内容が記されていません。それゆえその出来事について振り返って見ましょう。

その出来事が記されている個所は、「『あなたは杖を取り、兄弟アロンと共に共同体を集め、彼らの目の前で岩に向かって、水を出せと命じなさい。～略～モーセは、命じられたとおり、主の御前から杖を取った。そして、～略～その杖で岩を二度打つと、水がほとばしり出たので、共同体も家畜も飲ん

だ。」(民数 20:8-11) となっています。おそらく、モーセが「岩に向かって水を出せと命じなさい」と言われたにもかかわらず、「岩を二度打った」ことが原因の様です。この小さいことが大きな意味を持っていたのでした。

「出エジプト記」17章1から7節には、類似するお話があります。その個所でモーセは、「『見よ、わたしはホレブの岩の上であなたの前に立つ。あなたはその岩を打て。そこから水が出て、民は飲むことができる。』モーセは、イスラエルの長老たちの目の前でそのとおりにした。」(出エ 17:5-6) となっています。この時のモーセは、主なる神様の言うとおりにしているのですが、本日の「民数記」の個所ではそうではありませんでした。この二つの泉に関する物語の前後関係は正確には不明であるが、もし連続している出来事であるならば、モーセは、一度経験しているがゆえに、主なる神様の言われた通りにではなく、今まで経験した通りにしてしまったのでした。

そのように考えますと、「その杖で岩を二度打つと、水がほとばしり出たので」にある、「二度」という言葉は、重要です。単に回数を示しているのではなく、「水は打てば出る」、「岩を一回打って反応がないが、もう一回打てば出る」そのようなモーセの考えを暗示しているからです。モーセは、自分が体験から得た知恵や考えでそうしてしまったのでしょう。しかし、主なる神様はそのような行為を許さないのです。

これぐらいのことだと思ってしまうのですが、砂漠地帯で岩から水が出るという出来事は、まさに奇跡であり、通常考えられないことです。なぜそのようなことが起こるのか、それは主なる神様がおられ、そしてイスラエルを守り導かれているからです。不思議な力を用いて岩を叩けば水が出るとなれば、それは魔術か呪術です。モーセにその力があるわけではありません。また、主なる神様は、人間の命令次第でどんな奇跡でも起こしてくれると、認識されてもならないのです。『聖書』の主なる神様は、人間が従わなければならない方であるからです。主導権は常に主なる神様にあるのです。それが、ほかの神々とは異なる点です。またそうであるがゆえに、水を求める人々に水を提供するという、善い行いであっても、主なる神様が「聖」であることを示さなければならないのです。人間的価値観の善悪を超えたところのが、「聖」という概念が存在するからです。前回は、「岩を打って水が出た」、今回は「岩に命じれば水が出る」、水を出す手段を統一してもらった方が人間としては楽なのですが、そうはならないのです。水の不足という事態であっても、大切なことは水を出すことではなく、主なる神様が「聖」であることを示すことにあるからです。

しかし、「聖」であることを示すことが大切だといっても、主なる神様は、イスラエルに何なさらぬ方ではありません。実際に水は出ているからです。主なる神様はイスラエルの人々の訴えにしっかりと応えておられるのです。しかし、そのかわり、小さいことではあるが、その後大きな間違いにつながるミスをしたモーセは、責任を追及されて、カナンの地には入れなかったのです。

このような主なる神様と人間との、厳しい関係を持つのがイスラエルの人びとです。最初に出エジプトを失敗の物語と申しましたが、その失敗は、次世代にこの主なる神様との関係を受け継ぐための糧といえるのでしょうか。そして、その関係・信仰を維持するための手段、それが「律法」という法律です。もちろん、「信仰」は大前提ですが、メリバの泉の出来事に示されている通り、人間の「信仰」はすぐに揺らぎます。それゆえ、たとえ「信仰」が揺らいだとしても、主なる神様との関係を、外的に保つ方法が「律法」という法律なのです。しかし、この「律法」もその法解釈という面で人間的な思いが入ってきてしまいます。そして、主なる神様が「聖」であることを示すという、大切な事柄からそれてしまうことがあります。それは、「律法」自体が問題なのではなく、それを解釈し実行する人間の問題です。そして、そのことが今日の福音書の個所と関連しているのです。

「**そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。**」(ヨハネ 10:22) と場所はエルサレムですが、時期が変わりました。この「**神殿奉献記念祭**」は、「ハヌカの祭り」のことと思われます。紀元前 164 年にユダ・マカバイを中心に、シリアの支配からエルサレムを奪還し、神殿を清めた出来事を記念する祭りです。だいたい 12 月に祝われる祭りですが、イエス様の時代でも 100 年以上の歴史がある祭りであったと思われます。

さて、「**イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。『いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。』**」(ヨハネ 10:23-24) とある通り、祭りでにぎわうエルサレムという状況の中で、イスラエル・ユダヤの人びとが、もしイエス様がメシアであるならば、はっきり言って欲しいと問いかけたのでした。しかしイエス様は、「**わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。**」(ヨハネ 10:25-26) と答えられます。

イエス様の言葉に「わたしの羊」とあるのは、10 章 1 から 21 節で、そのことが話題になっていたからです。また、「業」とあるのは、9 章で、生まれつき目が不自由な人が、イエス様によって癒されるお話があったからです。その 9 章のお話が大きくかかわりますので、9 章のお話を簡潔にまとめますと以下ようになります。

生まれつき目が不自由であった人がいたのですが、その人はイエス様によってその目を癒されます。しかし、その癒しの出来事・業のために、人々からも親からも見捨てられ、律法に基づいて社会からも放り出されてしまいます。しかし、最後に彼は、イエス様と出会い信仰に至るというお話です。

このお話の背景には、律法の解釈がかかわっています。生まれつき目が不自由なのは、先祖が罪を犯した結果であると、律法を基にして解釈されていたからです。その説明は、目が不自由な人のためではなく、今、目が見えている人たちが安心し、また罪を犯さないようにと促すためです。生まれつき

目が不自由であった人は、イエス様によって目を癒されたのですが、誰が行ったかわかりませんでした。それゆえ、主なる神様が行ったという証拠がないならば、たとえ目が見えたとしても罪人であると社会から放り出されたのです。そうでなければ法解釈に問題が生じるからです。しかし、最後に彼は、イエス様に出会い、信じます。その主なる神様がイエス様を通してなさった業、その業を通した信仰です。このことを受けて、イエス様は、その出来事・業に救いを見出すものと、見出さない者として、羊にたとえて語られたのですが、そこには、誰かを犠牲にした、あるいは誰かの悲しみを無視して享受する、幸福や安心感の否定が含まれています。

先週、説教（口頭の部分）の中で、目が不自由であることからの回復を、信仰や知的事柄の回復のたとえに用いることの問題性に触れました。またそこから、教会こそが、バリアフリーあるいはユニバーサルデザインに心掛けなければならないことにも触れましたが、このことは、わたしたちが毎主日礼拝をすること、教会に集められることにもかかわっています。

わたしたちが、東京聖三一教会に集められ、礼拝する目的は、わたしたち一人ひとりの幸福・救いのためといえます。しかし、いつの日か世界中に幸福・救いが満ちるためにも礼拝しているのです。現在も戦いがあるこの世界で、後者の目標が達成されるのがいつの日か全くわかりません。しかし、わたしたちの教会が物理的に集まりやすいように、建築物として様々な配慮をすることは、後者の目標に向けた歩みの一つです（エレベーターや手すり、点字の『聖書』の用意なのです）。無関係ではないのです。しかし、この3年のコロナ禍で示されたことは、物理的なバリアフリー（ユニバーサルデザインであっても）の実現だけでは不十分であるということです。コロナ禍というバリアによって、すべての人が教会に集まることができなかつたときに、教会は何を示すことができるのかと問われたからです。しかしその問いへの答えの基礎は明確です。「信仰」による結びつきは、建物などの持つ物理的なバリアも、人間的な思いや考えや価値観などの精神的なバリアも超えているからです。課題は、「信仰による結びつき」をどう「業」として具体化するかということです。その具体化にあたって、過去の経験を学ぶことは大切です。しかしモーセの誤りの様にはなりません。礼拝とまじわりを通して、主なる神様に祈りつつ、次世代につながる事柄を目指さなければなりません。

コロナ禍があってもなくても、教会が、どんな隔てや妨げなしに安心できる集いであることに、変わりありません。課題は、それを今まで以上にどのように深めるかということです。A B合同の歩みを始めたわたしたちは、そのことにより一層取り組みたいと思います。わたしたちの歩みは、すぐに直接世界を変えるような活動ではありません。しかし、誰も犠牲にしない世界の実現、そのような平和に、少しずつつながる歩みです。その歩みをする人々を、イエス様は自分の羊として大切にしてください。これからもイエス様に守られる同じ羊として、ご一緒に歩み続けたいと思います。